

氏名	平 松 信
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	甲 第 500 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和55年9月30日
学 位 授 与 の 要 件	医学研究科内科系内科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	腎疾患と溶連菌感染 第1編 腎疾患における抗レンサ球菌C-多糖体抗体の検討 第2編 I g A腎症における溶連菌感染の研究
論 文 審 査 委 員	教授 金政 泰弘 教授 長島 秀夫 教授 木村 郁郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

(第1編) 腎疾患における溶連菌感染の関与を研究するために、溶連菌(レンサ球菌)細胞壁のC-多糖体を分離精製し、これまでほとんど行われたことのない各種腎疾患患者血清中の抗レンサ球菌C-多糖体抗体価を測定した。被検血清122例のうち、正常成人15例は全例8倍希釈以下、正常小児15例は全例16倍希釈以下で、32倍希釈以上の抗体価を示すものを陽性とした。急性糸球体腎炎は10例中9例が陽性で64倍から1024倍までの抗体価を示した。紫斑病性腎炎は5例中3例が陽性で8倍から1024倍までの抗体価を示した。慢性糸球体腎炎は45例中15例が陽性で、2倍から512倍までの抗体価を示した。一次性ネフローゼ症候群10例では4倍から8倍までの抗体価、ループス腎炎10例では2倍から16倍までの抗体価を示した。

抗レンサ球菌C-多糖体抗体は、急性糸球体腎炎、紫斑病性腎炎、慢性糸球体腎炎において高抗体価を呈しており、従来のASLO等の方法では証明出来なかった紫斑病性腎炎、慢性糸球体腎炎における溶連菌感染の関与を示唆すると考えられた。

(第2編) I g A腎症は一つの独立した疾患と考えられてきているが、問題も多い。自験例53例のI g A腎症について、その臨床像を明確にするため臨床的諸統計を行い、その病因を明らかにするため、患者血清中の各種の抗溶連菌(レンサ球菌)抗体を測定した。

先行上気道炎は55%に、習慣性扁桃腺炎は39%に認めた。経過中に肉眼的血尿を認めたものは18%であり、そのうち75%が先行上気道炎を伴っていた。ASLO値は9%が陽性であり、ASK値は15.1%、AHD値は11.4%が陽性であり、ASLO、ASK、AHDの3者のうち、いずれか1つ以上の陽性を示すものは32%であった。抗レンサ球菌C-多糖体抗体価は43%が陽性であり、その他の慢性糸球体腎炎では13%が陽性であり

有意の差が認められた。抗レンサ球菌C-多糖体抗体陽性例では53.8%が習慣性扁桃腺炎、先行上気道感染を認めたのみであった。

以上の結果から、臨床的にみてIgA腎症は一つの独立した臨床像をもち、その病因に溶連菌感染の関与している例がかなり多いと考えられた。

論文審査の結果の要旨

本研究は腎疾患における溶連菌感染の関与を研究したものである。第1編は各種腎疾患において抗レンサ球菌C-多糖体抗体を測定し、急性糸球体腎炎、紫斑病性腎炎、慢性糸球体腎炎において高抗体価を得、これらの疾患は何れも溶連菌感染の関与を受けていることを示唆するものである。第2編ではIgA腎症について各種の抗溶連菌抗体を測定し、その病因に溶連菌感染が関与している例がかなり多いことを明らかにした。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。